

第1回看護研究会

(新任看護師教育講座)

●日時 平成28年6月7日(火)

10時～15時30分

●会場 岡山県医師会館

三木記念ホール

●出席者 51病院206名・委員8名

新任看護師を対象に、第1回看護研究会が開催された。午前中は接遇について、午後は看護の本質についての講演を行った。

講演

ハートフルな仕事とは

～ホスピタリティ・マインドで
生き活きと働く～

講師
株式会社タンタピバ
ODコミュニケーター
板谷 和代 取締役

まず「働く」ということについてワークを交えながら考えた。なぜ「看護師」という仕事を選んだかという理由を分かっていると、仕事を続ける上で困難なことがあっても、心の支えになる。また、つまずいたら今の仕事を選んだ理由へ立ち返ることが大切である。

次に「ハートフル(心があつたか)

な仕事」についての説明があつた。

ハートフルな仕事には、相手への思いやりの心をもったマナーが欠かせない。まずは相手を思いやること、そしてそれを確実に伝える手段がマナーである。思いは目に見えないが、マナーにすると見える。心を形であらわすことが重要である。挨拶やお辞儀、笑顔や身だしなみ、言葉遣いなどにして、心と思いを、自分の態度や動きで表現することが大切である。

「ホスピタリティ・マインドで生き活き」という話では、ホスピタリティを「人と人が、お互いの喜びや感動を共有して、それぞれのこころがハッピーになる、そんな関係を築くために努力しようという気持ち、そして行動」と定義され、①自己肯定感：自分らしさを強みにし、強みを磨いて笑顔で過ごすこと ②仲間への共感：違いを受け入れ、共感すること。①②を合わせることが自己効力感につながり、笑顔と共感力をもち一歩前へ踏み出すことができる。一人ひとりが笑顔で前向きに、生き生き仕事に取り組めば、組織に一体感が生まれ勢いをもたらす。

看護師という仕事を選んだ理由に立ち返り、ホスピタリティ・マインドを発揮して人と向き合っていくことが重要である。

(看護研究委員 牧原百合子)

講演

看護の約束

—命を守り、暮らしを支える—



講師
岡山大学大学院保健学研究科
看護学分野
秋元 典子 教授

導入部では、先生ご自身の新人時代の失敗談に触れ、失敗はしても、同じ失敗は2回繰り返さず、積み重ねていけば結果は出てくることを新人に伝えられた。

本日の内容は、「看護はこういうことができるのです」という、看護の約束を説明することであると話された。なぜ、この基本的な問いかけをしたいと考えるようになったのかについては、①保健師助産師看護師法改正など看護職の在り方が議論されている現実があること ②大学の教養科目の授業の中で学生が「看護の仕事は医師のお手伝いをするのだ」と思っていました」と話す現実があり、このことは私たち看護職に何ができるのかを社会に発信してきたかを問われている証ではないかと考えたこと ③がん体験者が手術患者として直面した看護の現実から見えてきた現実、患者として望んでいることは、まとわりつく髪を整えてほしい、頸の汗を後ろまで手をまわし

てきちんと拭いてほしい等日常生活の一つ一つを整えてほしいという思いであつたこと、の3つの理由からである。

保助看法で看護師は、「厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者もしくはよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とするものをいう。」と定義されている。看護師は療養上の世話と診療の補助を同時に行い、これらの2つを融合させて、看護師ならではの実践を創り出す。看護の専門性は「命を守り、暮らしを支えること」である。このことは、ナイチンゲールの時代から変わっていない。

この「命を守り、暮らしを支えること」にはどのような作用があるのかを、セリエのストレス学説の適応エネルギーで説明された。ストレスへの適応を成し遂げる適応エネルギーには限界がある。看護師によって、不快やつらさを緩和してもらえれば、患者は不必要なエネルギーの消耗を避けることができ、身体侵襲から回復していくためにエネルギーを配分することができるのである。看護は、これまででも、これからも、人々の「命を守り暮らしを支える」ことを社会に約束する、と締めくくられた。

(看護研究委員 岩切真砂子)